

# 蝶ノ夏ノ山ノ氷馬但

山 本 広 一

兵庫・鳥取2県の境に聳える氷ノ山は別の名を四箇ノ山とよび、地理調査所発行の五万分の一地図「村岡」には須賀ノ山と記されている(同地図にある氷ノ山(1320m)とは別の山である)。海拔1510m、伯耆大山に次いだ中国第二の高峯で、冬季はこの北方5 kmにある鉢伏山(1221m)とともにスキー場として有名である。山は美方郡熊次村・養父郡関宮村・西谷村及び鳥取県若桜町に跨がり、熊次と若桜とを結ぶ氷ノ山越(1252 m)は古くから但馬・因幡をつなぐ間道として広く利用されていた。

氷ノ山に登るには、若桜(鳥取県側)または関宮(兵庫側)よりそれぞれ春米・熊次を経て上記の間道に従つて氷ノ山峠に至り、それより南東に折れて尾根道を辿ると、西谷村(兵庫側)横行部落のあたりより北西に進んで頂上に達するのことがある。これらのうち蝶を採集するには外野福定を経由する熊次の路が適当なのではないかと考える。

昭和12年(1937年)の8月、この地で兵庫県博物館学芸会主催の植物採集会が開かれたことがある。私はこの会に参加してはじめて氷ノ山に登り、種々の植物を採集して植物相の一端を知るとともに、この山が昆虫分布の研究にも大切な意味のあることを感じた。そのため会が終了した後にも尚しばらく滞在して蝶の採集につとめ、その結果当時本県より知られなかつたフジミドリやウラグロシジミ等の珍種を見出した。爾来この地への関心はしだいにたかまり、その後も1938, 1939, 1946, 1951, 1953, 1954年とたびたび出かけて調査にあたつたのである。

しかしながら山は峻しく、いたるところに急坂や断崖があつて危険であり、また大木や下草が繁茂して道を失うおそれがあるので、行動範囲はおのずと登山道附近に制限され、又“遠隔の地”が禍して各季節にわたつて赴くことが出来ず、そのため採集も蝶には余り芳しくもない7月下旬から8月上旬への僅かな間に限られてしまつた。その上この辺は一般に“個体数が乏しい”ために標本は意のように集まらず、遺憾ながら予期した成果を収めることが出来なかつた。

従つてこの地の蝶相を詳しく述べることは目下のところ甚だ困難であるが、まず気付く点は伯耆大山と共通する種類の少ないことである。例えば1937年には前記の2種がウスイロオナガシジミやヒメキマダラヒカゲとともに見出され、1939年には程遠からぬ福定の

裏山でアイノミドリシジミが得られた。これはやがて氷ノ山にも産するであろうと予想されたが、1949年遂に氷ノ山からも発見され、同時にエゾミドリシジミやウスイロヒヨウモンモドキ・ヒヨウモンモドキの発生することも明らかとなつた。また最近ではコキマダラセセリが採集されるなど、今後更に採集が重ねられるにつれて両高峯を結ぶ多くの種類が発見されるにちがいないと思う。

こうした事實は、近年所謂丹波高原地帯の調査が進み、大山の蝶相と酷似する点の少ないことが明らかとなつて来た今日、その中間に介在する土地として寧ろ当然ではあるが、その頃の私には興味をもつて調査に従つたものであつた。

私はここに手許にある標本と、確実な記録とに基いて、熊次村の一部を含めた氷ノ山夏季の蝶67種を説明し、今後の参考に資したいと思う。なお、最後にこの稿を草するにあたつて種々の便宜と教示とをいただいた西谷裕之・守本陸也・吉阪道雄・西村公夫の諸氏に厚く御礼を申し上げる。

## 氷ノ山蝶類目録

### I HESPERIIDAE セセリチヨウ科

1. *Daimio tethys felderi* BUTLER, 1881  
ダイミヨウセセリ  
セセリ中最も目につきやすく、個体の多いものである。
2. *Choaspes benjamini japonica* (MURRAY, 1875)  
アオバセセリ
3. *Ochlodes venata herculea* (BUTLER, 1881)  
コキマダラセセリ  
本種は従来伯耆大山の中腹から知られ、近畿や中国の地方には極めて稀なものとされていたが、1954年7月吉阪道雄氏によつて氷ノ山よりはじめて採集された。
4. *Thymelicus sylvaticus* (BREMER, 1861)  
ヘリグロチャバネセセリ
5. *Halpe varia* (MURRAY, 1875) コチャバネセセリ
6. *Parnara guttata* (BREMER et GREY, 1853)  
イチモンジセセリ
7. *Polytremis pellucida* (MURRAY, 1875)  
オオチャバネセセリ

Ⅱ PAPILIONIDAE アゲハチヨウ科

8. *Graphium sarpedon nipponus*

(FRUHSORFER, 1908) アオスジアゲハ

普通な種類で、氷ノ山南麓では至る所に見受けられ、1954年8月西谷村での経験では当時アゲハといえは殆んどがこればかりかと思える有様であった。しかし北麓には概して少いようである。

9. *Papilio machaon hippocrates* C. et

R. FELDER

キアゲハ

10. *P. xuthus* LINNÉ, 1767

アゲハ

一般に稀な種類である。

11. *P. macilentus* JANSON, 1877

オナガアゲハ

山間の溪流附近に多く、むしろ北麓よりも南麓に豊かである。

12. *P. protenor demetrius* CRAMER, 1782

クロアゲハ

13. *P. maackii tutanus* FENTON, 1881

ミヤマカラスアゲハ

本種は氷ノ山北麓にみるアゲハの代表者である。それは形が大きく、姿の美しいためばかりでなく、個体数が多く、山麓の樹間をぬつて飛びかう様子は全く採集者への大きな魅力である。山より流れ出る谷川に沿って稲田の上を往来するものや、人家の庭や墓地などに多い丈1m許りの紅花に集るものが多く、時には路傍のキカラスウリに来る場合もある。朝露の十分に乾ききらないカボチャの花を訪うものは、活動力が鈍く、しかも頭部を花の中に深く差入れているので、湿りに集る真風ものをねらうより採集ははるかに楽である。1939年私はこうした機会を利用して多くの個体を安々と得たことがあつた。

ところが南麓ではむしろ稀である。横行あたりの村人の話によれば、かなりにいるらしく思えるが、私が1953~54年の採集に滞在した前後4日間の記録では確実に本種と認められるものは僅か1例にしか過ぎなかつた。もつとも当時アゲハ類は各種ともに個体数が乏しく、殊に1954年には殆んど採集出来なかつた状態であるから、速断は許されないとしても、南に移るにつれてその数が減少することは事実である。

横行では本種のことをシオンベンチヨウといひ、オコリチヨウとも称している。北麓の熊次あたりでも同様に呼んでいるらしいが、シオンベンチヨウとは小便蝶の意であつて、それは蝶が人家近く現われて便所や流し水の附近をさまよひ、時には放尿したあとなどに湿りをあさることのあるためだろう。勿論こうした習性はこの種特別のものではないが、やはり人目につき易い関係から特にこの種に与えられたものに違いない。またオコリチヨウとは“オコリすなわちマラリヤ

病を媒介する蝶”をあらわし、村の人々はこの地方に流行したマラリヤ病がこの蝶に触れることによつて起こるものと信じ、これを捕えることを怖れていた。

14. *P. bianor dehanni* C. et R. FELDER, 1864

カラスアゲハ

南麓で最も多いアゲハは恐らく本種であろう。曾て横行の人々が沢山いと教えてくれた“オコリチヨウ”の中には、恐らく本種も含まれているにちがいないが、こうした恐怖は普通私どもがトカゲの背色に毒気を覚えるように異様に美しい青藍色の鱗片が一種の無気味さを感じさせて、これを目に見えないマラリヤの恐怖と関連づけるにいたつたものであろう。

[附 記]

1. *Melelaides alcinous* (Klug, 1836)

シヤコウアゲハ

熊次ではまだ目撃したことがないが、隣接する関宮には確実にいる(守本氏による)ので、この辺にもやはり発生するものと思う。

2. *Parnassius glauciaris* BUTLER, 1866

ウスバシロチヨウ

標題外で蝶はあるがついでに付け加えておこう。私はかねてから本県中央地帯の本種を調査したいと思ひ、殊に但馬南域の標本を希望していたところ、1935年5月西谷氏はこの蝶が西谷村横行附近に発生することを明らかにし、同年8月当時の採集品をすべて私に贈られ、併せて“横行部落はその多産地であり、……1日数百頭の採集が可能といつて過言でない……”旨の説明を寄せられた。其後守本氏からも熊次産の標本を頂き、氷ノ山山麓には毎年相当数の個体が発生することを知つたのである。その発生期については西谷氏の5月27日附の私信に“今が最も絶好の時期”と記されており、播磨地方に比べると“幾分遅れると思われる”という程度でないかと考える。

Ⅲ. PIERIDAE シロチヨウ科

15. *Eurema hecabe mandarina*

(DE L'ORZA, 1869)

キチヨウ

シロチヨウ科中最も多い種類で、山ぎわの濕りや山小屋のかげに20匹以上も密集していることが少くない。これらの群が殆んど黄色鮮かな雄ばかりであることは、単にその個体が多いからという理由のみであらうか。

16. *Gonepteryx mahaguru nipponica*

VERITY, 1909

スジボソヤマキチヨウ

氷ノ山の中腹で時々目撃するが、その数は必ずしも多くない。

17. *Colias hyale polyographus*

MOTSCHULSKY, 1860

モンキチヨウ

18. *Pieris rapae crucivora* BOISDUVAL, 1836  
モンシロチョウ
19. *P. melete* MÉNÉTRIÉ, 1857 スジグロチョウ  
IV. LYCAENIDAE シジミチョウ科
20. *Curetis acuta paracuta* DE NICEVILLE, 1901  
ウラギンシジミ
21. *Arhopala japonica* (MURRAY, 1875)  
ムラサキシジミ
22. *Antigium butleri* (FENTON, 1881)  
ウスイロオナガシジミ

曾て本誌 vol. 2, No. 3 (1953) に述べた通り、氷ノ山は私が本県で知った第2の産地である。時は1937年8月10日、村岡君の墓標を少し上った木材の伐出口である。あたりの茂みから飛び出して、ロープを結んだ合柙に休んだところを捕えたもので、全くの偶然であり、それ以来見ることが出来ない。

23. *Iratsume orsedice* (BUTLER, 1881)  
ウラグロシジミ

1937年8月10日地藏堂と峠との略中間で1匹の雌を捕獲した。完全に近い個体である。その後もこの附近を通る時には特に注意して探したが、何分にも路より踏み出すことの難しい崖際なので精しい調査も行えず、従つて第2の個体は得られずに終つた。ところが最近に至つて守本氏も採集された(? 1949)ことがわかり、今後への明るい期待をよせる次第である。尚標本は目下九州大学に保管されている由に聞いている。

24. *Favonius fujisanus* (MATSUMURA, 1919)  
フジミドリシジミ

1937年の8月10日は私がこの地において珍しい種類を次々に発見し採集した印象深い日である。本種もその中の1で、この蝶は当時鳥取県を除けば近くの府県からは知られておらず、これを得るためには遠く伯耆・信濃の方面にまで探し廻らねばならなかつた。それが足許より見つかったのだから嬉しい限りである。採集した場所は海拔凡そ1000m、路に張り出した傍の木の枝を敲きながら登るうちに、飛び出した1匹をすくつて得たのである。それは翅の大分汚損したいわば生き残りの雌ではあつたが、まことに得難い標本なので、更にあたりを入念に調査し、その後も訪う毎に充分な注意を怠らなかつたが、ついに再会する機会はやつてこなかつた。

そのうちに西谷氏から、当時西谷中学校に居られた守本氏が1匹の雌を採集していられることを聞き、採集場所の詳細をうかがいたく願つていた。ところが1953年西谷氏を訪問すると、都合よくその標本が氏のもとに保存されており、氏はこれを私への記念として譲られたのである。私はここに氏の御厚意を深く謝す

とともに、恐らく本県最初と思える雌雄標本が揃つて入手出来たことを誇りとさえ思っている。尚その標本については後日守本氏より「1949年7月10日氷ノ山頂上附近の尾根を飛びこそうとして捕えられたもの」であることが示され、上昇気流にのつて麓より舞い上つてきたものと想像する。こうした例は他の山にも見られることで、そうした理由から本種を採集するにはむしろ峠より上の尾根が適当なのではないかと考える。

25. *F. jezoensis* (MATSUMURA, 1915)  
エゾミドリシジミ

1949年守本氏によつて得られたのが氷ノ山よりの最初のものであろう。また吉阪氏も1954年の登山において得られた由である。

26. *F. orientalis* (MURRAY, 1875)  
オオミドリシジミ

27. *Neozephyrus taxila japonicus*  
(MURRAY, 1875) ミドリシジミ

28. *N. aurorinus* (OBERTHUR, 1880)  
アイノミドリシジミ

1939年私は鉢伏山麓で凡そ10匹を採集し、雌の一部を鈴木元治郎氏に贈つたことがある。これより前1937年に氷ノ山地蔵堂の少し上手の処で数匹のゼフィルスの雌が飛びかうのを目撃した。そこは山麓が縦に入りこんだ谷合で、谷底は急傾斜をつくつて麓へと伸び、たやすく蝶に近づく場所でなかつたが、季節的に考えて必らず珍種がいるものと信じていた。ところが1949年守本氏によつて氷ノ山から本種が採集された(守本氏はすべて種の同定を白水隆氏に仰がれている)ことがわかり、次で1952年には西村氏より氷ノ山越にて採集した旨の報せを受けたが、最近吉阪氏も得られた由に聞いている。その場所については吉阪氏の場合どうも前記の谷合らしく推測されるので、さきに私が目撃したのも本種だつたのではないかと考える。

29. *Rapala arata* (BREMER, 1861) トラフシジミ
30. *Lycaena phlaeas daimio* (SEITZ, 1909)  
ベニシジミ

31. *Taraka hamada* DRUCE, 1875) ゴイシシジミ  
1951年氷ノ山登山口で得たが、数は多くない。

32. *Niphanda fusca shijima* ERNSTORFER, 1917  
クロシジミ

氷ノ山では入手しやすいシジミチョウの1つで本誌(vol. 2, No. 3, p. 121, 1953)にも既にその名が見えている。私がこの山を訪れていつも目撃し、又採集するのは村岡君の遭難碑の建つ附近である。範囲は広くないが、路傍の低いコナラの枝を払うと必らず飛び出し、大して遠方へは移らないので簡単に捕獲する

ことが出来る。下、山麓の草花に採集した。

33. *Zizeeria maha argia* (MÉNÉTRIÉS, 1857) ヤマトシジミ

34. *Celastrina argiolus ladonides* (DE L'ORZA, 1896) ルリシジミ

35. *Everes argiades seitzii* (WNUKOWSKY, 1928) ツバメシジミ

LIBYTHEIDAE テングチヨウ科

36. *Libythea celtis celtoides* FRUHSTORFER, 1909 テングチヨウ

VII DANAIIDAE マダラチヨウ科

37. *Caduga tytia nipponica* MOORE, 1883 アサギマダラ

余り多くはないが、それでも登山の都度いくつかは目撃する。地藏堂の附近にも尾根にもいる。面白いと思つたのは1951年の場合である。九十九折の山腹で雌雄らしい1組の蝶を見かけたが、一挙に2匹を狙うことは取損じるおそれがあり、失敗すれば急に上昇して絶対採集は出来なくなるので、近づいた1匹(♂)を捕えて他を見送ることとした。逃れた蝶は幸驚いたふうも見せず下手の道へ移つていつた。それから凡そ4~50分、私が峠まで行つて引返えしてくるとまた1匹がうろついている。さつき迷がしてやつた蝶に思えてしかたがないのでそつと掬うと妙に早である。その間同じ所を飛んでいたと考えるのは甚だ変だが、時にはあの綿毛が舞い落ちるような緩慢さで狭い範囲を飛んでいるような場合があるのかもしれない。

VII. NYMPHALIDAE タテハチヨウ科

38. *Argynnis ruslana* MOTSCHULSKY, 1866 オオウラギンスジヒヨウモン

39. *A. cydippe pallescens* BUTLER, 1873 ウラギンヒヨウモン

40. *A. nerippe* C. et R. FELDER, 1862 オオウラギンヒヨウモン

41. *A. paphia paphioides* BUTLER, 1881 ミドリヒヨウモン

ヒヨウモン中最も普通な種で、草原や路傍の草花にはどこにでも見かける。

42. *A. hyperbius* (LINNÉ, 1763) ツマグロヒヨウモン

1946年8月初旬氷ノ山登山口に近いアザミの花で雌を1匹、更に翌日同じ所で雌を1匹採集した。この地としては珍しいものである。

43. *Limenitis camilla japonica* MÉNÉTRIÉS, 1857 イチモンジチヨウ

44. *L. glorifica* FRUHSTORFER, 1909 アサマイチモンジ

1951年熊次村外野の道路上で採集してより、氷ノ山地蔵堂の上手にある茅地や登山口の製材所跡でも見た。前種に混じて飛翔しており、その数も稀でない。尚南麓の西谷方面にもいる。

45. *Neptis aceris intermedia* PRYER, 1877 コミスジ

46. *N. pryeri* BUTLER, 1871 ホシミスジ  
1951年7月30日熊次村川原場部落で1匹を採集した。季節的にみて甚だおくれた感じがするが、翅の鱗粉が幾らかうすれた程度の完全な個体である。

47. *Melitaea protomedia* MÉNÉTRIÉS, 1859 ウスイロヒヨウモンモドキ

採集期の関係よ私はまだ目撃しないが、1949年守本氏によつて氷ノ山中腹の広い茅地から見つけられ、白水氏に送附されたのが現在九大に保存されているとのことである。1951年発行の江崎・白水両氏の「日本の蝶」(北隆館)にも産地の1つに氷ノ山の名が記されている。従来本種は伯耆大山の特有種であるかのような感じさえあつたが、最近には中国山脈地帯の諸所より報告され、1954年には西村氏が既産地を取調べて詳細な分布図を發表された(M. D. K. 別刷; ウスイロヒヨウモンモドキ、虫同友会、西宮)。尚本県下ではこの地の他に神崎郡段ヶ峯が記録されている。

48. *M. phoebe scotosia* BUTLER, 1878 ヒヨウモンモドキ

前種と同じ頃に出現する。鉢伏山麓の牧場附近に発生する可能性が大きいので、是非1度適期に訪れたいと思ひながら実現できずにいたところ、1949年やはり守本氏によつて氷ノ山から採集され、前記「日本の蝶」にもその名が挙げられている。その後1953年に西谷氏が南麓の横行附近で採集されたことがあり、私はその標本をいただいて大切に保管している。

49. *Araschnia burejana fallax* JANSON, 1878 サカハチチヨウ

1937年氷ノ山地蔵堂附近で採集したが、どこにでも見られるものである。しかし個体は余り多くない。

50. *Polygonia c-aureum* (LINNÉ, 1758) キタテハ

51. *P. c-album lunigera* (BUTLER, 1881) シーナテハ

1954年7月中旬吉阪氏によつて初めて氷ノ山から採集された珍しいものである。

52. *Kaniska canace no-japonicum* (SIEBOLD, 1824) ルリタテハ

53. *Nymphalis xanthomelas japonica* (SPICHEL, 1902) ヒオドリチチヨウ

54. *Vanessa indica* (HERRST, 1794) アカタテハ

55. *Dichorragia nesimachus nesiotus*  
(FRUHSTORFER, 1886) スミナガシ

山麓の溪流に面した石垣や河床の上によく見かける。西谷方面には少ない。

56. *Apatura ilia substituta* BUTLER, 1873  
コムラサキ

57. *Hestina japonica* (C. et R. FELDER, 1862)  
ゴマダラチヨウ

58. *Sasakia charonda* (HEWITSON, 1863)  
オオムラサキ

1937年鉢伏山麓の旅舎の前で、当時植物採集会に参加していた会員の1人が採集したことがある。個体数は甚だ少いらしく、その後私は唯1回目撃したにすぎない。

〔附 記〕

1. *Vanessa cardui* (LINNÉ, 1758) ヒメアカタテハ  
東麓の開宮にはその発生が確認されており、今後は熊次や西谷方面にも得られることと考える。

#### VIII. SATYRIDAE ジャノメチヨウ科

59. *Ypthima argus* BUTLER, 1878  
ヒメウラナミジャノメ

60. *Y. motschulskyi* (BREMER et GREY, 1853)  
ウラナミジャノメ

1度手にしたように記憶するが、手許に標本がないので、守本氏に伺つたところ、確かに産する旨の教示をいただいた。

61. *Minois dryas bipunctatus*  
(MOTSCHULSKY, 1860) ジャノメチヨウ

鉢伏山麓の牧場に近い草原にいる。この緩やかなスロープはあちらこちらに羊歯の繁みがあつて、蝶のくれ場所をつくっている。

62. *Lethe sicelis* (HEWITSON, 1862) ヒカゲチヨウ

93. *L. diana* (BUTLER, 1866) クロヒカゲ

64. *L. callipteri* (BUTLER, 1877)  
ヒメキマダラヒカゲ

大体800—850m以上の所に発生し、局所的ながら稀とはいえない。鉢伏山麓では牧場入口のクマザサの繁みにクロヒカゲとともに飛翔する姿が見られ、氷ノ山では大体地藏堂附近から上で認められる。

65. *Neope goschkevitschii* (MÉNÉTRIÉS, 1855)  
キマダラヒカゲ

66. *Mycalesis gotama fulginia*  
FRUHSTORFER, 1911 ヒメジャノメ

67. *M. francisca perdiccas* HEWITSON, 1862  
コジャノメ